

訪問診療に同行して

永源寺 謹 療 所 所 長 在 戸 貴 口 医 師 の 取 材 か ら (その 3)

フリージャーナリスト・佐藤幹夫

地域に看取りの文化が根付くまで

近江市永源寺地区では、9割以上の人人が在宅での最期を望んでいる。一方、永源寺診療所の花戸貴司医師が看取ったのは、そのうちの6割。3割の患者さんは、自宅で最期を過ごすことを望みながらも叶わず、病院で亡くなつたといふことになる。花戸医師は、誰もが自宅で最期を迎えることができるわけではない、どうしても病院を選ばざるを得ない人も必ず出てくる、という。しかしながら花戸医師自身は、最期は絶対に在宅で、と推奨しているわけではない。地域の過半の人が、自ら在宅での最期を望むようになつたのだという。

「これを看取りの文化と呼ぼう。かつての在宅死は、医療アクセスが困難だったり、治療から見捨てられた結果としてのそれだった。経済事情もあれば交通事故もあるし、医療資源の乏しさゆえ」ということもあった。もちろん、現在の永源寺地区は、このどれにも当てはまらない。花戸医師は述べるのだが、看取りの文化が永源寺地区に最初からあったわけではなく、永源寺診療所の医師となつた最初の年の看取り数はゼロ。2、3年たつて1人か2人。この頃から訪問診療の患者数が20人ほどになり、5年目で40人。7、8年ごろから看取りの数が20人を超すようになつたと。」「私は前から、いつでも診ますよといつていたのですが、やはり住民の意識が変わってきたのです。」

たことが大きいですね。家で亡くなつた人がお葬式をする、近所の人がお手伝いにいく、その場で、うちのお婆さんが診療所の先生に診てもらい、最期までお世話になつた、それがとてもよかつた、ということがローリーでひるがつていつたようでした】

あるとき、ある家で看取りをし、1週間ほどした頃にお婆さんたち5人が紹介状をもつてやってきた。どうしたのかと聞くと、最期まで診療所で診てもらいたいから、かかりつけ医を病院から診療所に替えたい、という。

「最期まで家にいたい、そついつていらんだ、という意識ができてきたのです。それが重要な変化でした。そこまで来るのに10年はかかるました」

家族が突然決断を迫られたら
花戸医師とチーム永源寺の3回目。今回も
現場からの報告となる。

れい。おばあちゃん、背中、診るわな」と、背中を診ていく。お嫁さんは、痰が多くなったといい、「呑みこんで、おばあちゃん、呑みこんで」と繰り返してくる。「ア、飯は、口からですか」と花戸医師。「はう。食欲が、もうお歳やから思うんですけど、だんだん食べる量が少なくなつたんです

しましようかな」とだけいい、それ以上の答えはなかった。「考えておいてくださいね。じや、おばあちゃん、また来るわ、何かあつたら、いってな」と、立ちあがった。

胎出直の後遺症があり、寝たきりになってしまった。在宅介護が13年と長期にわたっているが、息子さんのお嫁さんが、これまで一手に抱つてきた。筆者たちが訪ねたとき、ちょうどリハビリのスタッフたちが帰ったところだつた。ベッドの横には写真が2枚飾られている。85歳と88歳のときのもので、旧永源寺町でのお祝いと近隣の市町と合併して東近江市になってからの米寿のお祝いで、撮ってくれたものだという。満面の笑みが溢れていて、こちらの気持ちも和ませてくれる。この日はたまたま娘さんも嫁ぎ先からやって来ていて、「早くしなくなつたお父さんの所にいかせてあげた」と繰り返していた。

「こにちは、診療所です。おばあちゃん、脳の音をきくわな」と顔を覗き込みながら話しかける花戸医師。「肺の音はだいじょうぶ」といい、お腹に触れながら、「胃ろうのあともま

「老いゆ」と「死ぬ」との尊嚴に向き合つたために

な負担になるのですね。遠くにいる息子、娘も、急に尋ねられても、自分の親の最期などイメージする」ともできないでしょう。本人が自分の希望を述べ、家族もそれを納得する。そうやって決めていくのが、本人にも家族にも「いちばんいいことではないか」

花戸医師は、外来患者にも、必ず尋ねるようしているところ。

「もうすぐお迎えが来る」という」と

(5) 91歳女性。Eさん。

大たい骨骨折。認知症。Eさんの介護もお嫁さんが担っている。昨年まで心臓を患つていてEさんの旦那さんが、同じ部屋にベッドを並べ、花戸医師の治療を受けていたのだが、そのときにはEさんができる範囲の世話をしていた。お嫁さんは、花戸医師の顔を見るなり「夜なかに起きて、何か夢をみているように、ひとりで話してじる」とがある」という。花戸医師が「おなかが痛いとか、何か変わったことは?」と尋ねる。「ぜんぜん、大丈夫。ずっと熱を出したこともない」とお嫁さん。「体重は?」「31.9kg」。脚はよくないが、それでも歩行器を使ってトイレまで自力で歩いていくところ。

「おばあさん、こんにちは」と花戸医師が声をかける。「すみません、ありがとうございます」とEさん。「手術した方の脚、うずいて寝られないというトイレが大変だという。

よじ登のうとしている姿を見た看護師さんが、「がんばって、やつてみせて」と声をかける。

「がんばれ、がんばれ」と看護師さん。「Fさんがやつとベッドに辿り着くと、息が荒い」「はい、深呼吸して」

「おじさん、こけてないか?」花戸医師が尋ねる。「移動するにも考えて考えな、こけたら終いだと思うな。ほんと避けてしまえばいいけれど、苦しまなならんといけなくなるからなあ」とEさん。転ばないように、移動のときには細心の注意をしている。動かないと力が落ちていくし、動きすぎると転び、再びけがのもとになる。腕も片方は上げられるが、片方は半分までしか上がらない。

「便所はどうなってるの?」「風はひとりで。夜は手つづいてもろてぬ」「通じはだじょう

ことない?」「ありがと、大丈夫」。ありがとうがEさんの口癖のようだ。「(ヒ)イサービスの)もみじさんは、たのしいか?」と聞いても、やはり答えは「ありがと」「ねうちにおつて、何か困ることないか?」「大事にしてわるうつるから、なんもない」とEさん。「困る」と、心配なことならかな「なんもない。ありがとう」。「(ヒ)イさんは?」「ありがと。このごろは、一口おきくらやな」

Eさんは、月、火、木、土とデイサービスに通っている。花戸医師は、さすがに食事の少ない体に必要な量なんだと思いま」と伝えている。そしてEさんに尋ねる。「(ヒ)飯、おいしけ、おばあさん」「ありがと。おひじりわ」「じゃあ、ぎょうさん食べんか」「おかげたくさん食べるから」。そんな会話をさらに続けた後、「おばあさん、じゃ、また来るわ」「ありがと、先生も気を付けてな」とじつて席を立つた。「なんかあつたら、じつてや」「ありがと」シロウトがどこまで勝手なことを書いていたのか分からぬが、筆者にも、Eさんはそろそろお迎えがくるのではないかとじつうとが、お目にかかった途端に感じられた。花戸医師とEさんとのやり取りを聞きながら、おばあさん自身もそれは理解している。そして受け入れ、お迎えを待っている。そんなことも思われた。不思議な感覚だった。

Fさんの胸の内

(6) 83歳男性。Fさん。

「(三)田)じつへんぐり?」「痛みじめ、飲んでるけど、夜中にうずくま」とは、「寝てもな、痛いな」「寝る前の薬増やしてもいいけど」。

花戸医師は続けていつ。「水は溜まつてないの、抜いたり、注射したりしなくとも大丈夫。痛み止めはもっと強いのにできるけど、強いものにしたから痛みが消える、というわけでもないしな。足の力も落ちていしないし、できるだけ動く方がいいと思つけて」

そして尋ねた。「もし、歩けんようになったら、どうする?」筆者ははつとした。「おうよ、どないなるんやろ思つてな」「(ヒ)こか、病院で預かってもらうか」「病院へいつても、ようならんやろ」「よくはなりんけど、悪くせんよう」

にしないと。背骨が悪くなつてから、長じしな」「手術しても、あかんやろ」「ほんまに、歩けんよ」になつたら、どうしたい?」「難しぃな」なにが?」「病院いつてあかんことないけど、トイレが難しいな。小はいけるけどな。大は、誰か一緒につてもらわない、と、座つたら起きられん」。「わいな(大変だな)」「おかげさんでな、今日まで、ありがとう思つてるやけど

■ さとう・みきお(フリージャーナリスト)
養護学校教員を経て2001年からフリージャーナリストに転身。著書に「百閉症裁判(朝日文庫)」、「7歳の自閉症裁判(岩波現代文庫)」、「(日)閉症」の子どもたちとおえってきたこと(洋泉社)、「ルボ 高齢者医療―地域で支えるために」(ルボ認知症ケア最前線)(ともに岩波新書)。著書に本連載が収められた「ルボ 高齢者ケア―都市の戦略、地方の再生」(ちくま新書)のほか「知的障害と裁き」(岩波書店)など。

気軽に口にしてよい」とも思えなかつたので、車に揺られながら黙つていると、花戸医師は意外なことを話し始めた。「(ヒ)覽の通り、ぼくはたいしたことをしていないのです。どこで、何か困ることないか?」「大事にしてわるうつるから、なんもない」とEさん。「困る」と、心配なことならかな「なんもない。ありがとう」。「(ヒ)イさんは?」「ありがと。このごろは、ヘルパーさんだつたり、近所さんだつたり、その人たちがたくさん支えてくれる」

たしかに、血圧や熱を測つたり、ガーゼやり薬やらを補充したり、細じました作業の多くは看護師さんが担つていた。花戸医師は、ただ話しているだけのようみえたけれども、聴診器を当てるだけではなく、必ず患者さんのからだのあちこちに触れていた。そしてもう一つ印象的だったことは、医師と看護師さんの2人が家族の前に立つた途端、患者さん本人はもちろん、居合させた全員に笑顔が広がり、安堵感が家のなかに満ちていったことだつた。これが、10年かけて作り上げてきた「看取り文化」の根っこにあるものかもしれなかつた。